



百億の昼と千億の夜

光瀬 龍

—— 日本SFシリーズ11

早川書房

光瀬 龍

百億の昼と千億の夜

著者略歴

昭和3年東京に生る

昭和28年教育大学医学部動物学科卒

現在洗足学園高等部生物学科講師

著書

「墓碑銘2007年」

「たそがれに還る」

「洛陽2217年」(以上早川書房刊)

検印
廃止

定価 四〇〇円

百億の昼と千億の夜

日本SFシリーズ

〈11〉

昭和四二年一月一〇日 印刷
昭和四二年一月一五日 発行

著者 光^{みつ}瀬^せ 龍^{りゅう}

発行者 早川 清

印刷者 鈴木 静

発行所 早川書房

東京都千代田区神田多町二一〇二
電話 東京(二話) 一五五一〇八

用紙・サツキ製紙KK／表紙・東洋クロスK
K／印刷・東洋印刷KK／製本・KK堅省堂

百億の昼と千億の夜

夢をのみ

百億の昼と千億の夜に

— R・M —

目次

序章		五
第一章 影絵の海		一七
第二章 オリハルコン		三二
第三章 弥 ^み 勒 ^{ろく}		一〇三
第四章 エレサレムより		一五五
第五章 喪える都市		一八五
第六章 新星雲紀		二二六
第七章 最後の人々		二六四
第八章 遠い道		三三六
あとがき		三三三

序 章

寄せてはかえし

寄せてはかえし

かえしては寄せる波の音は、何億年ものほとんど永劫にちかいむかしからこの世界をどよもして
いた。

それはひとときたりともやむことはなかったし、嵐の朝はそれなりに、なぎの夕べはそれらしく
あるいははげしく、時におだやかにこの青い世界をゆり動かし、つたわってゆくのだった。

寄せてはかえし

寄せてはかえし

かえしては寄せる海。かがやく千億の星々は波間にのぼり、夜明けの薄明とともに広漠たる波頭
の果に沈む。

ことに暗い夜はかすかな流星が長い光の糸を曳いて虚空をななめに、ほの白い水平線のかなたに

墜ちていった。その光は消えがたい残傷となって星々の間に記憶をとどめた。

星座はしだいにその形を変え、青い星に代って白い星が、橙色の星に代って赤い星がその位置をおそい、またゆずり合い、すれちがっては新しい形象を編み出していった。

寄せてはかえし

寄せてはかえし

かえしては寄せる波また波の上を、いそぐことを知らない時の流れだけが、
夜をむかえ、昼をむかえ、また夜をむかえ。

茫々たる時の流れは、万象の上に呵責ないその足どりの跡をとどめる。たちまち過ぎさるものの中に在って、つねに、今は、崩壊しさり、いたずらにその形骸のみ深く堆積してさだかでない記憶と化すだけだ。もとより海も例外ではない。幾千億日の昼と夜、その水の面に映した星の光も、吹きすさんだ風や雨、燃える陽のかがやきも、凍結した波間に渦まいた雪も、今は水の分子の一つ一つに吸収され包含されて、たずね得ようもない。

海は。

時の語る長い長い物語をただ内におさめ、決してくりかえされることのない変容を記録しつつけてきたのだった。

風と雲と波と、明るい昼と暗い夜と。

海こそはもつともよき、時の理解者であった。

寄せてはかえし

寄せてはかえし

かえしては寄せる幾千億日の昼と夜。その間も波はたゆみなく鳴りつづけ、さわぎつづけてきたのだった。

遠い遠いある日、この惑星がまだじゅうぶん過ぎるほどの収縮熱と、地下の溶けた岩質や金属から噴き出す熱とで煮えたぎっていたころ、まだ水素も酸素も、たがいに結びついてある一つの新しい何ものかを生み出そうということなどはせず、勝手に白熱のガスとなって荒れ狂い吹きまわっていた。地表はいたる所で炸裂し、爆発ガスと熔岩は怒濤のように天高く噴き上げ、はためいて渦巻いた。原初の山や丘がもり上ってはふたたび熔岩の海の中に埋没し、滝のような火花がこの惑星のほとんど半球をおおって咲きに咲いた。

この惑星系を強大な重力の場で統禦するオレンジ色の太陽は、適当な熱と放射線とをもってこの惑星に間断ない刺激をあたえ、その内部深く、また表面のひろがりの上に精緻な物理的、化学的変化を生ぜしめてきたのだった。二十億年におよぶ永い永い作業の結果が、今あらわれようとしていた。

空は厚い厚い雲におおわれ、陽はまだこの火焰の荒れ狂う地表にはとどいていなかった。ほとんど暗黒の世界を、ただ熔岩が急流のように走り、百千の火花を散らしてぶつかり合い、大洋のようにゆれ動いていた。厚い雲の層の下はその爆発の火光にぶきみに照り映え、焼けただれた地表のかがやきが、この惑星をそのまま死へもちこむかと思われた。

厚い雲の中では電光がはためき、落雷の火柱が高く高く雲層をつらぬいた。流星の雨が何度か、

この荒れ狂うガスの大気に向って突撃をくりかえし、その中の何個かは確実に灼熱の軟泥を直撃したはずだ。暗い厚い雲に照り映える巨大な火球とそのあとにつづく火の嵐は、見るものもないこの世界をどんなにか美しくまたすさまじくいろどったことだろうか。

しかし創世紀の饗宴はようやく終ろうとしていた。そしてそのつぎの舞台はすでに地表をおおう火の海の下に用意されていた。

だが、この天体の真の主役であるものの出現には、さらに永い永い時を待たなければならないのだった。

そのむかし、宇宙空間にただよう目に見えない微細な星間物質の一個一個が遠い星々の弱いかすかな光の波におされおされて、このあたりの空域にしだいに集ってきた。一ミリメートルの一億分の一というような微細な物体が、光の波におされていった一時間にどれだけ移動するものだろうか。一メートルの距離を動くのにどれほど永い時間を必要とするものだろうか。ほとんど無にひとしい宇宙空間のあちこちから、ただよい集ってくるその動きの遅々たる歩みとそのたしかさ。いつか永い時が過ぎ、星間物質の集りはしだいに濃密なガスの雲となってこの空域に浮かんできた。

マイナス百六十度Cに近い冷たいガスの雲は、背後の星々をかくし、あるいは近くの恒星のかがやきを受けて、光の雲、散光星雲となって茫々と光を展べた。その濃密な集団のなかで星間物質のそれぞれの粒子は、たがいに引き合い、吸引しあって、無数の小さな塊に成長していった。やがてそれらは、小さな塊はより大きな塊へ、大きな塊はさらに大きな塊へと発展していった。やがて星間物質のもっとも大きな集合体がこの空域の重力の場を支配することとなった。この巨大な統率者

は、ついにあの力の象徴である水素核融合反応の息づかいをはじめた。他のずっと小さな集合体は、そのかがやきと原子の力の前に整然と居を占め、以後、ここに惑星系を結んだのであった。

中心にあるオレンジ色の恒星は、一秒間に約五億六千四百萬トンもの水素を燃やして、五億六千萬トンのヘリウムを作り出した。このとき失われてゆく四百萬トンの質量が刻一刻、すさまじいエネルギーに変わって、周囲の宇宙空間にひろがっていった。

この惑星は十個の惑星を持っていた。そのもっとも内側を回るものは、中心の恒星より約五千七百万キロメートルの距離をおき、またもっとも外側に軌道をとるものは、平均約六百億キロメートルの遠くにあった。その内側より三番目のものは直径一万二千キロメートル。約三百六十五日でその軌道を一周していた。永い永い時の流れは、この惑星を形造っている素材の上に大きな変化を与えた。惑星自体の重力は素材を緊縛し、その中心に数万度におよぶ収縮熱を生ぜしめた。加えて放射性元素は營々たるその崩壊の過程に、おびたしい熱を発散した。それらの熱は、そのころようやくこの球体の表面をおおうに至った地殻をも、融かしさり灼きつくしていったのだった。

凄絶なほのほの時代は永かった。惑星はそれ以後の気の遠くなるような永い永い変化の年月の最初の第一歩を、おのれの内部にたくわえられた高い熱を発散することではじめたのだった。噴き出した熔岩は多くの物質をさらに多くの化合物へと変化させ、またそこにあったさまざまな物質を気体として自由に放散せしめた。

やがて噴き出す水蒸気は渦まいて厚い雲の下を這い、真紅の鏡の破片のようにかがやいていた。永い永い時の移り変りののち、水蒸気はいつしか霧となって地表めがけて降りはじめた。

天にまで届く火の柱、いつやむともない猛焰と爆風。灼熱の熔岩は火の大河となってなお不毛の

地表を焦がしつづけていた。荒れ狂う熱雲の上に、吹き千切れる霧はたちまち蒸発して地表にとどくはずもない。だが水蒸気はしだいに濃く、粒を大きくし、ついに霧は明らかに雨となって厚い雲から降ってきた。しかしその雨が地表にとどくまでには、またさらに数千万年を必要とするのだった。

永い永い時の移り変りののち、

最初の雨滴がようやく地表にまでとどいた。それは一瞬のうちに蒸発してしまった。しかしその時間はたとえ数百分の一秒であろうとも、確実な冷却水と、つぎに生れる全く新しい変化の最初の到来として、この惑星の歴史の上にこれまでになかった重大な記録を止めたのであった。

時はゆっくりと過ぎ去り、百年が、千年が、万年が、そしてさらに億年を数えるころ、雨はしだいに強く、はげしく、やがてしぶきを上げて降りそそいだ。高熱の水蒸気がおそろしい勢いでふくれ上り、大気はくりかえしくりかえし引き裂けた。熔岩の焰の海の温度がたった一度さがるのに、どれだけの年月と水量を必要としたことだろうか。

雨は幾万年、幾十万年の間、絶え間なく降りそそぎ、やがて熔岩の火の海が熱い泥ねいの原と化し、なお噴き上げる高熱の水蒸気の渦の中によりやく黒い火成岩の地肌があらわれてくるまで、火と水は戦いつづけたのであった。

ついに火の退却するときがやってきた。

熔岩を噴き出したために収縮した低地に、水がたまりはじめたのだ。

冷えた熔岩の多孔質の肌は吸えるだけ水を吸ったのちに、その孔に押しつまった微細な破片のために、もはや水を通さない堤防となった。

さえぎられた水はそこに満々たる湖水を現出した。雨はなおはげしくその水面をたたきつづけた。無数の内海はつらなつてしだいに大きな大洋へと成長していった。多くの火山は、外観だけはなおいささかのおとろえも見せずに壮烈な爆裂をくりかえしていた。雨と降る火山弾、天をおおう噴煙、急流となつてはしるほのほの熔岩流。たえまなくおそってくる猛烈な地震、地すべり。雨はそのすべてを押し流すほどすさまじく降りそそいだ。

大気の大循環のエネルギーがあるていどおとろえたとき、しだいに薄く、矢のように千切れ飛ぶ雲の切れ目から、最初の太陽の光がこの荒れ果てた地表を照らした。煙とも雲ともつかぬ分厚な暗いガスの重なりの中から射しこんできた一筋の陽光は、赤茶けた爆裂火口の断崖を照らし、もうもうと熱い湯気を吐く大洋の面をきらめかせた。そのかがやきの中で、遠い火山の噴き上げる黒褐色の煙と、その斜面を流れくだる熔岩の急流とは、どんなに鮮烈に見えたことだろうか。

はた、また、

地平を水幕でおおうはげしい雨足の暗い動きが、おりから灰色の雲層を背景に、幾重にも浮き上った虹とともに、どんなにこの平原を荒涼と見せたことだろうか。

夜は、その雲の切れ間から星がのぞいた。大気のはげしい流れのために、星の光は今にも吹き消されるかとばかりまたいたことだろう。そのときこの惑星ははじめて、おのれを生み出した大宇宙をのぞいたのだ。遠い遠いどこからか、なにものかが呼びかける声を聞いただろうか。星々は凄壮な光を、なお荒れ狂う地表に投げかけ、しかし、そのあとにやがてくる静穏な時を告げていた。歴史はまだはじまったばかりであり、これから幾多、転変の永い年月が来るのだった。

あたたかい雨水のプールはさまざまな物質を溶かしこんでしだいに濃厚なスープとなっていた。比熱の大きな、またすぐれた溶媒である水は、つぎからつぎへと新しい物質を呑みこみ、おのれの中でそれまでになかった全く新しい物質を造り出していった。そのおびただしい化合物は、複雑な有機物の中から蛋白質を組み立てていった。

永い永い歳月が確実に、音もなく過ぎ去っていった。

空から降ってきた水と、地の底からしぼり出された水とは、やがて地表の窪地に集り、この惑星の表面積のほとんど三分の一を占めるにいたった。地表はようやくこのころ、陸と水とはっきり分けられるようになった。窪地に集った水はもうそこから移動することはなかったし、かえってそのおびただしい水の重量をもって地殻を押さえつけ、その沈下をうながしたのだった。広大な水域の周辺部ではなおはげしい火山活動がつづけられ、火山噴出物はさらに多くの酸性、塩基性の物質を水に溶かしこんでいった。

雲間洩れる太陽の光が、その新しい広漠たる海面に強烈なエネルギーを吹きこんでいった。日に何回となくおそってくる地軸を流すようなげしい雨は、たえ間なく海をうすめ、地を洗って、流れこむ多量の無機物をふくんだ水と入り乱れて水塊を作った。

薄墨色の雲は千切れ千切れて、そこから染めたように青い空がのぞいていた。そのたなびく層雲に、沿岸にそびえる山々は、遠く幻のようにかすんでいた。大地向斜の造り出したそれらの山々は一日に数センチメートルもの成長をとげつつあった。なおゆれやまぬ地震と地すべりは、大陸の成長と変貌を告げていた。

幾つかの大陸が出現し、それをとりまく海洋との間に急激な、あるいは緩慢な進退がくりかえさ

れた。最初、単調だった海岸線はしだいに複雑な湾や入江を刻み、日夜、陸地から流れこむ土砂のために、海もまたその傾斜をゆるめていった。

その海の、波おだやかな表層のどこかで、硫黄や、燐や、カリウム、カルシウム、そして窒素、炭酸ガス、アンモニア、さらにたくさん物質を原料として最初の原形質が作られた。それらが複雑にからみ合って原形質を構成するその条件の到来は、極めてまれであり、またせつかくでき上ったものも、たちまち崩壊してしまったことであろう。おびただしい失敗や不幸な試みのくり返しのちに、いつかおのれ自身で繁殖し、エネルギー代謝を営む極めて簡単な生が出現した。これを真の生物と断定を下すことはむずかしい。生物命体と無生物とはもとより確然たる区別などはないにしてもここではまだ、より生物的特殊性の少ない素朴なものであった。それらのものの間に、吸収するものと吸収されるものとの序列が生じ、生存競争の苛酷な開幕のベルが鳴った。淘汰は必然的によりすぐれたものを生み出す。濃厚なスーブの浅瀬に出現した简单素朴な原形質は、やがておのれを生み出した大自然に対してさえ挑戦するような高度な知性体への発展の必然性をすではらんでいたのだった。

その間にも海は、ゆるやかなしかしはげしい変化をとげつつあった。大陸を二つに分ける細長い海はいつしか消え去って、そこにこの惑星の表面でもっとも雄大な一つの高みを作り出した。そのただきはずねに鋼のような氷雪をよるい、そこから巨大な氷河がすべり出しては、何度も、はるか下界である地表に攻めこんでいった。

四つの大洋はその茫々たる水面で今やこの惑星の氣象を掌握していた。また四つの大陸は、海の攻撃を果敢にくい止め、独自の自然をその内陸深い所に形造っていた。

すでに二十億年の歳月が過ぎさり、つぎの二十億年が来ようとしていた。

海には無数の生物がうごめき、泳ぎまわり、また分裂や産卵をくりかえしていた。

三葉虫はこの惑星の海の高岸地帯をひろく占領し、しばらくの間はそこへ何ものの侵入も許さなかった。堅固な装甲と、当代比類ない感覚器官とは、かれら以上に強力な生物のあらわれてくることを阻害していた。軟体動物や棘皮動物は、体の本質的な構造では決して三葉虫に劣るものではなかったが、その防禦的性格は三葉虫と覇を競うにはあまりにも消極的であり過ぎた。三葉虫はその大きさ、二センチメートルから二・五メートルまでの数百種類があらわれ、かれらの種属の繁栄をうたった。

しかしそのころ、そうした三葉虫の群れに追われながらも、青い海の深みで、しだいにつぎの時代のにない手としての力をたくわえ、ためつづけていた種属があった。

かれらは最初のうちこそ、当時の流行であった厚い堅固な装甲をまとうていたが、やがてその不利をさとして、それを軽いくく小さなキチン質の小板をつらねたうろこに置き換えた。外鰓を内鰓に、扁平な体形をより水の抵抗の少ない紡錘形に、球形の小眼を魚眼レンズに、そして無数の関節式の泳遊肢を数枚の効率の高いひれに変えた。

もちろん、こうした変化は百年や千年の年月で生れるものではない。何千万年という時の流れにうち勝つ忍耐と努力がそれをなしとげたといっても決していい過ぎではないであろう。絶え間ない三葉虫の攻勢の前に、おびただしい犠牲を払いながら、そして何度か絶滅の危機にひんしながら、その危機をのりこえるたびに、より新しいより環境に適した型が編み出され造り出されていったのだった。